

水稻の生育・作柄状況（令和3年度）

和歌山県農業試験場

耕種概要

品 種：キヌヒカリ、きぬむすめ、ヒノヒカリ
播種期：5月21日
移植期：6月10日（稚苗機械移植、調査株のみ1株3本手植）
区 制：(20株/区×3反復) /品種
栽植密度：20.8株/m² (30cm×16cm)
施肥量 (kg/10a)：元肥 N-P₂O₅-K₂O=4.8-7.2-5.6
追肥1 N-P₂O₅-K₂O=2.4-0-3.0
追肥2 N-P₂O₅-K₂O=2.4-0-3.0

水稻の生育概況

- 苗質について葉齢は、いずれの品種もほぼ平年並であった。草丈はいずれの品種も平年を下回った。一方、乾物重はいずれの品種も平年を上回った（データ省略）。
- 移植後の葉齢は、いずれの品種も平年をやや下回って推移した。草丈は、いずれの品種も移植後40日では平年を上回ったが、移植後50日では、いずれの品種も平年並となった。茎数は、移植後30日以降、‘キヌヒカリ’、‘きぬむすめ’で、移植後35日以降、‘ヒノヒカリ’で平年より少なかった（データ省略）。
- 最高分けつ期は、‘キヌヒカリ’で平年より5日遅く、‘きぬむすめ’は平年並、‘ヒノヒカリ’で平年より2日早かった。
- 幼穂形成期は、‘キヌヒカリ’で平年より2日早く、‘きぬむすめ’は平年並、‘ヒノヒカリ’は平年より2日遅かった。
- 出穂期は、‘キヌヒカリ’、‘ヒノヒカリ’で平年より1日遅く、‘きぬむすめ’は平年並だった。
- 成熟期は、‘キヌヒカリ’で平年より1日、‘きぬむすめ’で平年より3日遅く、‘ヒノヒカリ’で平年より3日早かった。

収量及び収量構成要素

- 精玄米重は、‘キヌヒカリ’で平年よりやや少なく、‘きぬむすめ’で平年並、‘ヒノヒカリ’で平年比84%と極めて少なかった。
- 穂数は、‘キヌヒカリ’、‘きぬむすめ’で平年並、‘ヒノヒカリ’で平年よりやや多かった。一穂粒数は、‘キヌヒカリ’で平年より極めて多く、‘きぬむすめ’で平年並、‘ヒノヒカリ’で平年より極めて少なかった。玄米千粒重は、‘キヌヒカリ’、‘ヒノヒカリ’で平年並、‘きぬむすめ’で平年よりやや軽く、登熟歩合は、‘キヌヒカリ’でやや低く、‘きぬむすめ’で平年並、‘ヒノヒカリ’で平年よりやや高かった。
- なお、和歌山県の作況指数(11月9日 農林水産省公表)は「100」であった。

玄米品質

- 整粒率は、‘キヌヒカリ’で62.4%(過去7年平均62.6%)、‘きぬむすめ’は64.6%(過去4年平均70.8%)、‘ヒノヒカリ’では74.7%(過去7年平均69.5%)であった。また、整粒率が低下した要因としては、未熟粒が最も多く、次いで、被害粒の順であった。

令和3年度水稻作況試験データ

和歌山県農業試験場

項目		キヌヒカリ	きぬむすめ	ヒノヒカリ
最高分けつ期 (月/日)	本年値	7月20日	7月15日	7月15日
	平年比(日)	+5	0	-2
幼穂形成期 (月/日)	本年値	7月18日	7月26日	7月31日
	平年比(日)	-2	0	+2
出穂期 (月/日)	本年値	8月8日	8月18日	8月23日
	平年比(日)	+1	0	+1
成熟期 (月/日)	本年値	9月13日	9月28日	10月2日
	平年比(日)	+1	+3	-3
穂数 (本/m ²)	本年値	301.3	316.5	316.2
	平年比(%)	103	101	105
一穂粒数 (粒/穂)	本年値	101.2	101.1	76.5
	平年比(%)	117	103	83
玄米千粒重 (g)	本年値	22.1	21.5	22.8
	平年比(%)	97	95	100
登熟歩合 (%)	本年値	78.9	88.0	90.1
	平年比(%)	94	102	105
精玄米重 (kg/10a)	本年値	531	605	497
	平年比(%)	94	97	84

注) 平年比は、過去7年間のデータのうち、最小値と最大値を除いて平均した数値との比較
 出穂期、成熟期の数値の- (マイナス) は「早い」を、+ (プラス) は「遅い」を示す
 玄米千粒重、精玄米重は、玄米水分15%換算値

項目		キヌヒカリ	きぬむすめ	ヒノヒカリ
整粒(%)	本年値	62.4	64.6	74.7
未熟粒(%)	本年値	31.1	21.9	20.5
被害粒(%)	本年値	5.7	13.0	4.4
死米(%)	本年値	0.7	0.4	0.03
着色粒(%)	本年値	0.1	0.1	0.4

注) 数値は穀粒判別器(静岡製機ES-1000)で測定したもの

